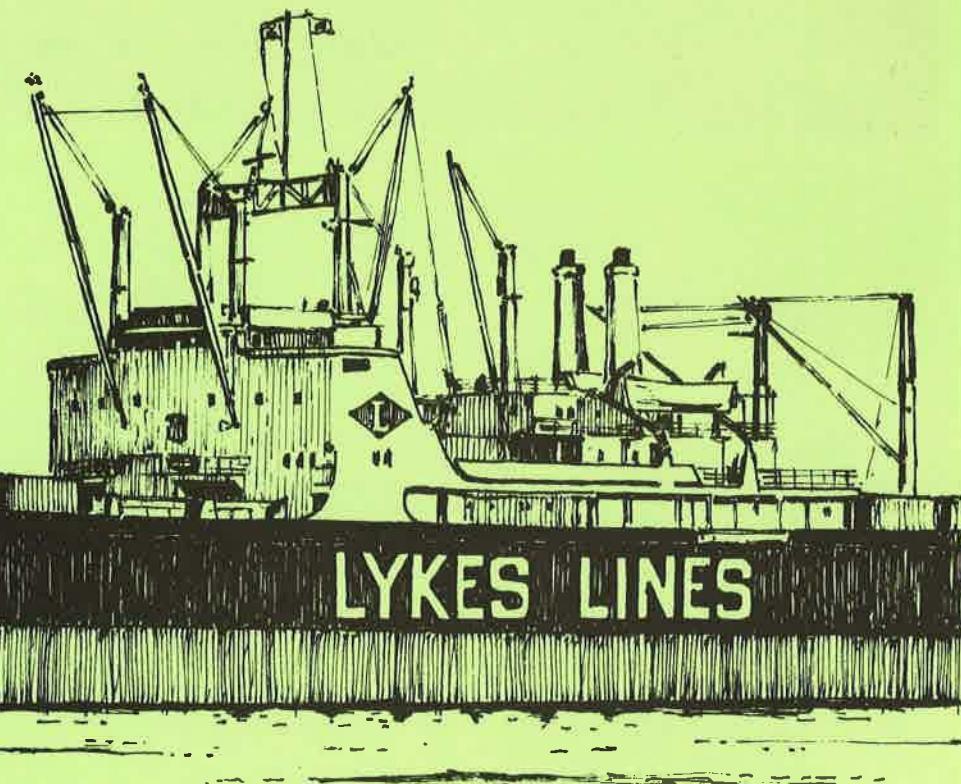


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



"ZOELLA LYKES"

1982 K.MANNAMI

第4号

海文堂書店 1982・5 [4]

〒650 神戸市中央区元町通3—5—10
(電)

雜木林が歴史を見て來た	芦谷川慕情	多田繁次
—丹生の自然を守るために—		
太宰治のはがき	兵庫県勤労者山岳連盟	
山科のたぬき	坂本哲男	
真説かぐや姫	木山 蕃	
汽笛(上)	室井 梓	
ぶつく・えんど	角本 稔	
郷土誌の窓		
23	20	19
	15	12
	11	9
		5

1

次

フランスのエスプリ アンドレ・ブラジリエ展

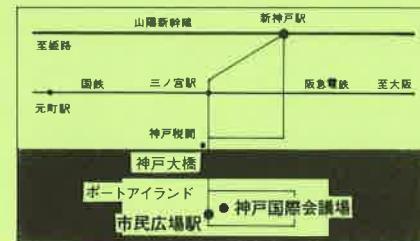
カタログ・レゾネ出版記念●第4回作家招待展

'82 5月 23日(日)・24日(月)

神戸国際会議場レセプションホール(ポートアイランド)

主催：神戸市立美術館
共催：海文堂書店
後援：フランス大使館
兵庫県
神戸市
協力：ほるぶアート
VISION NOVELLE・PARIS

神戸国際会議場ご案内図



● 交通のご案内

- ・ 国鉄、阪急 三ノ宮駅 からポートライナーで約10分
(市民広場駅下車) 徒歩1分
 - ・ 国鉄、阪急 三ノ宮駅 から車で約10分
 - ・ 新幹線 新神戸駅 から車で約15分
 - ・ 大阪国際空港 から車で40分

芦谷川慕情

回 想

多田繁次

ここは丹生山系の北麓、淡河村野瀬の里、カヤ葺の農家が点在し、レンゲの赤と、菜の花の黄色と、麦の緑が交織する華麗なカーペットがひろがる。

春のはなやかな田園風景の中、細い野道を歩いて山へ、芦谷川渓谷へと向う。路肩の草むらを彩るオオイヌノフグリ、ムラサキサギゴケ、スズメノヤリ、タンボポなどの野花が幼いころの、ふるさとのなつかしい想い出をよみがえらせる。

芦谷川によりそゝ山径は、地元の人びとの愛の手入れで快適そのもの、それもその筈、この谷川の水は、地元農民にとつては田畠の灌がい用水であり、生活用水（飲料）でもあるのだ。

小さな滝が次から次へと現われる。水よどむ淵では水

底の砂粒が一つ一つ読みとれる、きれいな、あくまでも透明な水。対岸の山腹の雜木の自然林は新緑が崩し、所どころにヤマザクラの白い花むらを仰ぐ。
ウグイスの快調なメロディーは心をなごませるが、突如として足もとのヤブ陰から飛び立つヤマドリの羽音に胆を冷やす。

なかほどの出合で投町の辻からの支流と、稚子ヶ墓山腹からの本流が合流する。右へ分かれて投町の支流へ進む。

急端が滝となつて出合へ落下するところは山腹の巻き道を登つて溪流のほとりへ出る。溯つて行くとほぼ円形の淵が現われ、まわりを岩の壁がとりまく。きれいな水がよどみ、峡谷状に細まる上流から二段、三段と段差をつけて落下する小さな滝が、水面にやさしい波紋をひろげる。相寄る両岸の広葉樹林が空をおおつて薄暗く、幽境といった風情である。巻き道をたどつて上がって行くと、その峡谷を見下ろすことができる。雨後の水量の多いときは岩床に碎ける激流が壯観である。

溪流のみぎわの岩盤を伝つて溯ると流れは緩やかにな

いこんな場所が国境になつてゐる。南北朝のころ、両軍の争いの場であつたといわれている。

さらに清らかな流れと、雜木林の、詩情豊かな山径を登りつめると投町の辻へ出る。淡河本町と山田を結ぶ山越えの往還が通つてゐる。

芦谷川はそんな溪流である。

現在

木肌の縦縞模様が美しいナラ種の高木林は新緑と黄葉の衣替えの季節感はいうまでもなく、冬枯れの寂境にも美しい落葉の絨たんを敷いて私たちを歎ばす詩の世界である。

その雑木林こそ人の心を和めると同時に、この低い山の、小さな谷川が源流域に至るまで豊かな清流を絶えることなく補給、その落葉はやがて肥沃な土となつて下流域の耕地の地力をも養つてくれる。雑木林こそ人間や生物にとつては貴重な、母なる自然である。

そんな雑木林の中の山径を登つて行くと、自然石を無造作に積んだ石塚があり、中心に「堺」と彫った標石がはめてある。これが摂播国境塚である。地勢上特徴のな

素朴な純農村淡河の里は、終戦後、神戸市に編入され北区淡河町となる。それから約三〇年の歳月が流れた。その間、のろいのろい速度で村は表情をえていった。道路の改良による交通事情や家屋の改築などについて、或は人の心もそれなりに変つたかもしれないが、私たち登山者にとって最も目立つのは、季節の春の田園風景の変異である。

全国的な農業構造の変革はここで、役牛は姿を消し、麦の緑と菜の花の彩りをも奪つてしまつた。土色一色の単調な田んぼは、稻の植付けを待つばかりである。

だが私たちにとって嬉しいことは山も、芦谷渓谷も、そんな近代化とは無縁に、昔のままの姿でひつそりと息

づいていたことだった。終戦直後に兵庫カンツリーができたのと、その後に神戸市が中山林道を天保池の奥まで侵入させた以外に、これといって開発という名の自然破壊はなく、千数百年前、高麗から渡来した童男行者によって開山された丹生山をめぐる史実と、その間に育まれた多くの文化財や伝承もさることながら、この山系北面には芦谷川のほかに、屏風谷や鳴川谷など、芦谷川に勝るとも劣らぬすばらしい溪流が、神戸離れした深山幽谷のたたずまいを見せ、山行く者の心をとらえる。時間と

金をかけて、わざわざ遠方へ行かなくとも、この恵まれた自然環境を身近な市内にもつ市民はほんとうにしあわせである。半世紀以上も前からこの山棲に親しみつづけて、限りなき愛と感謝を捧げる私は、開発という名の破壊の波がここへ迫ろうとすると、身を切られるような想いがする。先に屏風谷が、ついで鳴川谷もその波に脅かされようとしたことがある。そのとき私はいちばん辺鄙にある芦谷川こそ最後まで残れる秘境としての望みをかけた。

ところがあにはからんや、その芦谷渓谷が真っ先に槍

玉にあがった。ゴミ産業廃棄物等埋立処分地にする、と神戸市が決定したのである。あの美しい芦谷川を守ろう、住みよい神戸のためにー。と心ある市民団体が市に再考を求めて立ち上がっている。しかし、市の態度は高慢で頗る強硬である。（詳細略）。

神々の座は穢いゴミで埋めてはならない。
清らかな自然環境の保全こそ、市民の健康と人格育成の母体である、と私は思う。



雑木林が歴史を見て来た

—丹生の自然を守るために—

兵庫県勤労者山岳連盟

田植どきの田園地帯は明るい。鮮やかな緑が見渡す限りひろがって、雨さえも透明な翡翠色に染まって見える。梅雨期を陰鬱なものだとするのは、生活の大半を室内で送らねばならない都会人の感覚であろう。

こんな時期、雑木林の散策ほど心安まるものはない。様々な下生えの草の葉にも花にも露がきらめき、樹々の葉も木肌も洗われて色鮮やかに輝いている。初夏というのに冷え冷えとした空気に、心の中の塵も濯がれるようである。しかも杉林と違つて夏の光がほどよく洩れてきて、明るい。雨を吸つて柔らかくなつた落葉を一步一步ふみしめて行くと、誰でも思索家になる。その夢想を破るものは、巨大な砂防ダム、電線や電柱などの人工物が眼に入るとき、自動車の排気音が耳に入るとき以外にな

い。文明の匂いをかぐまでは、雑木林の明るい静寂に身を委ねることができるるのである。

その雑木林も都市周辺では稀少なものになりつつある。いや、農山村地帯でも開発の手が伸びて亡んだ所も少なくない。国木田独歩の描いた「武藏野」の風景も消失寸前で、その雑木林を保存するために運動がなされているとも聞いている。

雑木林は或る意味で日本の原風景ともいすべきものである。それは多く低山もしくは高山の森林限界以下を覆い、人里近くに位置している。薪採り、炭焼き、神事や仏事の供花採取、祭祀など、人間と深く関わりを持ちながら存在してきた。木地師、採葉行者、鉱山師などの山民たちが活躍した昔、更に遠く縄文時代の初期にも既に漆器が作られていたことが発見されている。

自然と人間を対立するものとして捉え、自然を征服することによって人間の繁栄を計るというような西欧文明の思想は、近來見直される傾向にある。だが、日本では早くから人間は自然と共存する術を心得ていた。炭焼に入つても、粗朶を採つても、山を裸にするほどに林を伐

採することはなかつた。雑木林といふものは人間が植えたり管理したりして出来たものではないが、他の動物と同列に人間を生かしてきたのである。人間の方も適度に利用することによって雑木林とその生態系を生かしてきたともいえる。

そんな雑木林の一つ、いや、歴史的にも景観的にも貴重な雑木林が亡びようとしている。

神戸市北区の中央部を東西約三十キロに渡つて連なる丹生・帝釈山系の中心、芦谷川渓谷がその場所である。

同じ神戸市内の山でも、丹生・帝釈山系は六甲山系ほどに知られていない。市街地のすぐ後方につく六甲山系と違つて、こちらはその背後にひっそりと隠れているからであろう。

それだけに、丹生・帝釈山系は開発の波をまともに受けたことを免れてきた。今度、神戸と中国縦貫道の吉川ICなどを連絡する国道が通ることになり、東部にゴルフ場が一面あるにはあるが、六甲山系を覆いつくしたかの感がある巨大な砂防ダムもなく、まして別荘やレジャー

施設もない。管理されたものでない生の自然をそこに見ることができる。山に詳しい人たちが掌中の玉と愛しんで、自分だけのコースを他に教えることを惜しんだほどである。

しかも、知る人ぞ知る、この辺りは「丹生文化圏」と呼ばれ、箱木千年家、山田六条八幡神社、無動寺、寿福寺、多聞寺、石峰寺など、その他数えきれない古社寺や文化財が丹生・帝釈山系を中心にして集中している。つまり古代からの歴史が里にも山にも深くしみ込んでいるということである。

その一例として『播磨風土記』逸文の記事を現代語訳にして引用してみる。

「オキナガタラシヒメノミコト（神功皇后）が新羅の国を平げようと（明石付近）来た時、（遠征の勝利）を神々に祈つた。その時、国土の基礎を堅めた大神（イザナギ、イザナミ神）の御子ニホツヒメノミコト（丹生都比売命）が明石国造の石坂比売にのりうつり、お告げを下した。『私をよく祭つてくれれば、あらたかな靈験を示そう（中略）』といって、赤土（丹土）を出して与えた

（後略）」

神功皇后は神から下された赤い土を武器や船などに塗つて出陣し、勝利を得たという。この丹生都比売がいた

山が摂津最西端にあって播磨地方へ突出した形の丹生山で、現在もその山頂に丹生神社がある。古風土記は和銅六年（七一三）に選上の命があつた地方誌であるから、既にその当時において神話化されているほど遠い過去のことであつたのであろう。

丹生山（五一六m）はこの山系の最高峰ではないが、播州方面からは最もよく見え、三百m台に高度を下げた

六甲山系西端の頭ごしに明石海峡を通過する船の目標物にもなつていて。丹生山に住む天狗が夜ごとに山頂の杉の大木の上から海上をにらみ、船人の眼にはそれが二つの燈火のように見えたという燈明杉の伝説もある。

とにかく、西方から先進技術を持って渡來した人々が先づこの山に目をつけたとしても不思議はない。丹生都比売命は、朱や薬の原料として、またメツキに有用な丹土（硫化水銀）の技術を携えた海人族の代表であつたのかかもしれない。鉱産物としては丹生山の東方に続く帝釈

山に源氏が開発したという帝釈鉱山があり、銅のほか金銀を産出していた。渡来技術者集団を惹きつける条件が揃つていたのである。

その後、六世紀の前半に百濟から、王子恵、童男行者（両者は同一人かもしれない）が渡来して、丹生山に壮大な堂塔を設け、神鉄箕谷駅北方に聳える東ノ峰（城山）を奥の院として丹生・帝釈山系の殆ど全域の峰々に堂を築いたという。丹生山明要寺の起りである。帝釈山や金剛童子山という名前も、そこで祀られた堂名を起源とする。いわば盛時の名残りである。

明要寺は平安時代末に平清盛がバトルンになつて、一時は更に隆盛になつたが、源平の争乱をはじめとして、南北朝時代、戦国時代の変転期には必ず戦火に巻きこまれ、天正七年（一五七九）には秀吉の三木城攻めに際して別所方についたため全山焼亡の憂き目にあつた。戦後に辛うじて再興はなつたものの江戸時代には昔日の面影はなく、明治になると間もなく廃寺になつてしまつた。

しかし、古く創建された巨刹だけあって、明要寺の遺産は莫大である。丹生・帝釈山系とその周辺の古社、名

利や文化財となつて残つてゐる。三木の刃物産業にしても、丹生山を中心に集まつてきた韓鍛冶（からかぬち）古代渡来系の冶金技術者たちを遠い祖先とするといえなくはない。前に記したように、有野、八多、大沢、淡河、山田など北区の各町と三木市東部、つまり丹生・帝釈山系を囲む地域を「丹生文化圏」という所以である。

このように何重にも歴史的遺跡に覆われた山系であるから、どこを歩いても古人と共にいる気分になる。戦国山城の跡でもある金剛童子山では神秘的な伝説と細川・別所両氏の攻防に思いを馳せ、丹生神社への参道を登りながら、立ち並ぶ丁石（永徳＝南北朝、明和＝江戸）の二種がある）に清盛の昔をしのぶのも、山行に一層の興をそえる。

それに加えて、前に述べたような自然に恵まれているのである。どの谷へ入っても安心して咽喉のかわきをいやせる冷たい清流があり、下生えも含めて変化に富んだ植生を示す雑木林が見られる。四季おりおりに眼を楽しませる景観がある。

そんな丹生・帝釈山系の中央部、芦谷川上流が産業廃棄物の埋立地になろうとしているのである。この山系中

でも特に清流で知られた芦谷川が選ばれた理由が分らない。処分地は必要としても、なぜここでなければならぬのか。他に十数カ所も候補地があつたというのに何故と、私たちは歎かずにはいられない。

芦谷溪谷は全長四キロ足らず、小規模ながら、岩と水の織りなす変化は様々な姿を見せて飽かせない。アマゴは敏感に人の気配を察して滅多に姿を見せないが、カジカの声を聞き、ハツチヨウトンボの可憐な姿は目にすることができるであろう。もし案内者があれば、天狗原、陰陽石、義経・静隠れ岩などの民俗伝承から、地もの人たちがこの谷へ寄せて來た愛情が知られるであろう。

この溪谷が産業廃棄物で埋めつくされてしまうのである。その上、隣接する中山大杣池付近には「青少年公園」と称して、三百台収容可能な駐車場を備えたレジャー施設のようなものが出来つつある。いまにしてこの自然を守らなければ、私たちは他の三団体と共に立ち上がったのであるが、広く市民の参加をお願いしたい。街路樹や植林されたものにくらべて、自然林である雑木林は全国的にも減少していて、いまや貴重なものになっている。

太宰治のはがき

坂本哲男

ばならない。梶井基次郎、井伏鱒二とともに、ほとんど全作品を耽読し、最も親近感を覚えていた作家である。しかし、相当の気まぐれであり、会えるかどうか。が、思い切って、三鷹のお宅に手紙を出してみた。

それから、五、六日経った寒い日。ふとんにくるまで、うつらうつらしていると、破れ障子の間から、下宿の女主人がポンとはがきを投げこんだ。物憂く、手にとってみると、飛び起きてみると足るおどろき。

○

『挙復、貴翰拝誦仕りました。作家は作品が全部のもので、三鷹にある者は、抜けがらです。わざわざおいでになつても、つまらない思いをするのぢやないかと思ひます。このごろ三鷹の陋屋でひとり自炊生活をしてゐます。三時頃が好都合です。三鷹駅で降りて、玉川上水に沿うて吉祥寺の方へ二丁ちかく引返し山本邸から右へ曲り、まつすぐに一丁ほど来ると左手に井上邸あり、その前の露地をはひりつきあたりです。草々。』（昭和19年

そうなると、どうしても、太宰治さんに会つておかねけである。

下宿の女主人に、男がひとり、自炊をしている所へ行くが、何を持参すればよろこばれるかときいたら、かなり大きなカボチャを一つ、出してくれた。野暮な手土産とは思つたが、太宰さんなら、実質を評価してくれるだろう。

そいつを風呂敷に包むと、柳行李の奥から着物とハカラを取り出した。どういうわけか、和服に威儀を正して、

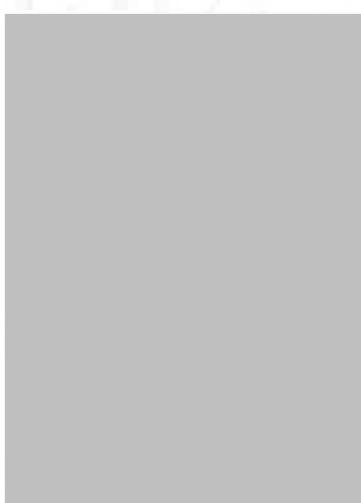
手にはカボチャをぶら提げて、秋、武藏野の面影をとどめる三鷹の小道を、はやる心をわざと静めながら、ぶらぶらと…。

玄関に入ると、膝小僧を抱き、柱にもたれてボンヤリしていた太宰治。「米はある」といい、それではと、ごはんを焼き、カボチャを煮て、ほとんど何もしゃべらずに二人して食べた思い出。そのあとで、太宰さんは、井原西鶴の戯作性について、あたかも獨白をしているよう

に、時には、歯の欠けた顔にうつすらと微笑を浮かべながら、いろんなことを語ってくれた。そして、情死事件。

あれから、もう40年近い、いま。わたし自身もすでに60才近いが、毎年、六月十四日にやって来る桜桃忌には、

この一枚のはがきを取り出すのが、わが青春時代を繰る「喪章のついている心懐」となつていて。



山科のたぬき

木山 蕃

例年なら鬼会を参觀する節分の休暇を、入院中の上司の見舞に充て、薄日の山科駅に降りた。

駅前の案内図に目当てを探していると、音羽、清閑寺が目についた。秦恒平氏の文学の里だ。須磨から国電快速で居眠りながら着いたせいもあって、京の町と山科が意外に近いのだった。内蔵助が祇園や伏見へ遊びに通いづめられたわけだ。

見舞いの帰途、遅い昼食を摂るために古い家並のうどん屋に入った。たぬきを注文して出されたのは、一つまみ下ろし生姜が載っているあんかけの丼。「へ・き・づ・ねにあんかけがたぬきどス。」阪神間のそば玉に油揚のたぬきと違つて、なるほどあんかけの下に油揚一片とうどん玉が透けて見え、そこはかとなく愛嬌じみた狸の雰囲気がある。

真説かぐや姫

室井 紹

昔、駿河の国に竹取の翁というものが、いた。山野に分け入って竹を切り、竹細工を業としていた。六十才をこえて子どものない夫婦は、淋しさのためかふけるばかりであった。なんとなく人生の疲れを感じさせる小春日和のある日、比奈の谷間でみつけた竹は、割りやすく、切り口からほのかな甘い恋の香りが感じられた。仕事の竹籠づくりは思いのほかはかどったので、勇んで編む日が続き、おもしろさに便乗し竹籠はじょうずにでき、みな喜んで買つていった。老夫婦は仕事が楽しみで、かつ広い藪の中での二人きりの仕事だけに、誰にはばかることもなく、大胆な行動と服装で、どんどん仕事がはかどった。ばあさんの着物の裾が乱れるなど眼中になく、仕事に精が出た。じいさんの大割りの竹からは竹紙がひらひらと舞い、所かまわす吹きまわつた。

が三ヶ月で成長して成竹となるかのように、どんどん成長し、百日たらずで成人し、月のものが始まつていこう美しさを増し、いろいろくなつていった。そのころから翁の夫婦は元気のよさにまかせて働き、たちまちのうちに富み栄え、かぐや姫の評判は国中に広まつた。

かぐや姫を妻にもらいうけようと、若い男たちは昼夜を問わず翁の家の周囲をさまよつた。なかには財力、権力にものをいわせて熱心に求婚を迫つた貴公子もあつたが、姫は難問ばかりをふつかけてすべてが不成立に終わつた。

こうした噂はついに帝の耳にまで達した。帝は宮中の権力で后にしようとしたが、姫の承認は得られなかつた。そうして、七年ばかりの月日が過ぎた。その間、かぐや姫は今まで育ててもらった恩返しにと家事を手伝つた。そして、八年めの五月闇のころ、姫は物思いにふけるようになり、翁夫婦を前にしてさめざめと泣く日が続いた。そして言うには「わたくしは破竹の精で、人の子どもではありません。それで贋などという恥しいものを持つていません。お母さんとともに風呂に入らなかつた

あるたそがれどき、ばあさんの着物の裾から一枚の竹紙がまい込み、奥深く入つてしまつた。そのためか急に氣分が壮快になつて、胸さわぎを感じ、かつての青春時代にもどつて波うつた。じいさんも竹紙の甘い恋の香りの誘惑で、なんとなく人恋しさで、久し振りで男女のいとなみが行なわれ、淋しかつた人生に急に春めいたものを感じた。二人の仕事は倍増し、喜々として能率があがつた。その後、竹紙をなめて唾液をませると、それが触媒として働き、いゝそろ効果的で、すばらしい媚薬となることを発見した。その老夫婦が疲れた生活中に、寸時を得ていとなみを続け楽しんだことはいうまでもない。

さて、竹紙の愛用をはじめてからのご両人は、頭髪も日に日に黒味を増し、還暦の竹の秋を境として、日一日と若さがよみがえつてきた。そうした楽しい心の青春の日々は矢のように流れ過ぎ、八十八才の米寿にかわいい女兒が生まれた。二人は周囲の人々から「年がいもないたわむれもの」などと嘲笑されるのを恥じて「割つた竹の中から生まれた」と、いつわつて育てた。この子は竹の精を受けただけあつて皮膚が艶にして、色が白く、筍

のもそのためです。来る十三日の竹醉日（竹迷日ともいいう）には園へ帰していただきます。そして、竹を守り育てなければなりません……」この話を聞いた夫婦は仰天し、かくて娘に求婚した帝の力をかり、娘に思いとどまるようになつと、ただちに十二日から幾百という兵隊を動員して、かぐや姫の家のまわりを幾重にも包囲した。しかし、十三日の午前零時十一分、忽然として、育ての両親と帝への置き手紙と不死の薬の入つた壺を残したまま、煙か霞のよう消え去つた。手紙は、長々とかぐや姫が破竹の精であることと、帝のもとに嫁することより、人類すべての夫婦生活を楽しくするために仕える使命をもつて生まれてきたことを告白し、人類を幸福にするために一命を捧げる決心がしたためであつた。

帝はかぐや姫を娶ることができないまとなつては、不死の薬もいるものかと、天に近い駿河の国の山頂で、翌年の五月十三日午前零時十一分に手紙を焼き、その靈薬をふりかけた。その灰は、いまもなお上昇気流にのつて世界中の人類を幸福にするために流れつづけていると云われる。いかなる生物もこの上昇気流にのると、たち

どこにふつとんでしまう。昭和四十一年三月五日、イギリスのボーイング七二七が富士山頂を飛び、上昇気流にのって機体がまご二つに割れ、何百人の乗客全員が死亡した惨事は、改めて不死の靈薬の偉大さを物語るものである。

そのかぐや姫の手紙を焼いてからは、その山は不死（富士）と呼ばれ、いまも当時の煙が上昇気流とともにたちのぼっているといわれる。ことに初夏の竹醉日は、

姫の涙で曇り、富士の山は絶対に姿を見せることがない。

いっぽう翁の夫婦は、その後も若さへ逆もどりを続け、ついに破竹の精の手伝いをして地下茎に昇格し、姫の変生した蘿でつぎつぎと筒という子どもを生み続けている。かぐや姫の生いたちの竹林は、静岡県吉原市比奈にあり、いまは岡田氏が所有している。その竹蘿には丸い自然石を重ねた六十センチほどの石碑があり、「竹採姫」と優雅な細字で彫り刻まれ、いまでは破竹の蘿の中の静けさに包まれているのである。不思議なことに、他の竹は六十年という周期で開花枯死するが、この竹ばかりはかぐや姫にあやかったのか、年中みずみずしく枝葉を茂

らせ、何年たっても開花枯死などということがなく、鮮緑の若さが続いているということである。

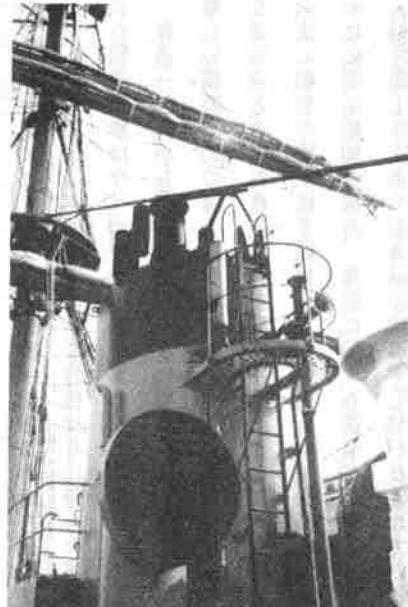
このかぐや姫の墓がある吉原市は、富士山が一番きれいに見える場所である。また、スルガということばはマレー語の極楽とか、天国という意味もあるらしい。かぐや姫の終焉の地として、まことにふさわしく美しい所である。やはり、日本人が南方からの渡航民族であるといわれるだけに、静岡県は日本の臍の地域である。

なお、ハチクの国字は破竹で、竹稈を焼いたり割ったりするとき、大きく威勢のよい音が出ることから名である。破竹の竹紙が一番よく剥げて有用というか、媚薬になる。正月のトントド祭りとか左義長といわれるものは破竹でないとあの厳粛さはわからない。



汽笛（上）

神戸觀光汽船船長 角本 稔



「灯台」、「かもめ」、「別かれの汽笛」、などではなかろうか。テレビ局の港の取材でもディレクターが「船長汽笛を鳴らして呉れませんか」と注文する。この音を入れないと画面から「港」のイメージが湧かないのだそうである。

港を演出するといつてもよいこの汽笛、最近聞けないからといって、船から取り去られたのでなく、現在もそれぞれの貨物船や客船等、各船舶の煙突の前やマスト上に設置され必要な場合に適宜吹き鳴らされている。

汽笛の種類は時代と共にその品質は変化している。かつては長い筒状で蒸気を通して鳴らしていた。つまり蒸気機関車の汽笛と同じで、陸の人々の耳の奥に残つている音色ではなかろうか。これは船に使用していた機関が蒸気機関であつたので必然的に蒸気が使われたのであるが、エネルギーが重油の登場と共に機関が内燃のディゼル機関にとつて替わり二十数年前から次第に蒸気船が消えて行つた（昭和三十四、五年頃にはまだ五、六隻の蒸気船が神戸港に残り活躍していた）。

この頃から登場するのがトランペッタ状の汽笛である。「縞のジャケツのマドロス」、「霧の波止場」、

港を訪れる人々が不思議そうに問う。確かにいわれてみればこの頃余り汽笛が鳴らず、港がとても静かである。^{とか}陸の人思い描く港のイメージとは、演歌に歌われる

ように「縞のジャケツのマドロス」、「霧の波止場」、

内燃機関の始動は圧縮空気によつて行なうので、この圧縮空気を汽笛に送り込み振動板を振るわせて鳴らすのである。これは現在ほとんどの船舶が使用している。

最近小型船には自動車のクラクション状で電気で鳴らすのが登場している。バッテリーや発電機を備えているのでその電気でベルのように振動板を振るわせて鳴らすのである。長短二本セットにして音色は耳に優しいが、音の到達距離は今一つという感がある。

普通一般人から見れば簡単そうに鳴る汽笛であるが、難しい国際条約の海上衝突予防法（水上における船舶の交通安全と水路の秩序維持を図るために制定された法律）（船舶の航行性を保持し人命の安全性を保持するため必要な船舶の構造、施設に関する法令）に定められている海上保安部や海運局の指導、監督がなされている。

少しご紹介すると、長く鳴らすのを「長音」（四秒六秒間）、短かく鳴らすのは「短音」（一秒間）と、定められていて単発や、組合せによつて信号が異つていて、たとえば「短音一回」はその船が針路を右へ転じている。「短音二回」は針路を左へ転じている。「短音三回」は

規格品に統一される。すでに新造船には新規格のものが登場してきている。
船舶安全法の設備規定によれば一四三条の二に、船の長さの違いで第一種から第四種まで分けられて、基本周波数から音圧が定められている（注、海上衝突予防法施行規則にもある）。—別表による—

汽笛は指向性を有し、できるだけ高い位置に設置しなければならない。音はその船の通常聞ける場所において

一一〇dBを越えず、できる限り一〇〇dBを越えないような位置にあること、と定められ余り自船の音が大き過ぎても相手船の汽笛が聞きとりにくいでこの様な配慮と別表

船 舶	長 さ (m)	基 本 周 波 数 Hz (ヘルツ)	音 圧 dB (デシベル)
第一種	二〇〇以上	七〇以上、二〇〇以下	一四三以上
第二種	七十五以上、二〇〇未満	一三〇以上、三五〇以下	一三八以上
第三種	二〇以上、七十五未満	二五〇以上、七〇〇以下	一三〇以上
第四種	二〇未満	二五〇以上、七〇〇以下	一二一〇以上

機関を後進にかけている。「長音、長音、短音」は右側を追い越す意志を相手船へ伝える。他に霧中信号、遭難信号、場合によつては祝笛（進水式など）、弔笛（遭難現場の慰靈など）にも使用することがある。以上の例に示すとおり全て汽笛は、その鳴らし方が法令に定められているので、他船が近くにいる場合目的なくして使用出来ないのである。もし不注意に間違つて使用したら付近の船が驚いて針路を転じ衝突の危険さえ生じるのである。数年前に大阪で車の運転手がクラクションを鳴らしたことで、前の運転手にピストルで射殺され世間を驚かした事件があつた。これ程はなくとも車のクラクションによる運転手同志のトラブルは絶えないが、海上では前述のように鳴らし方が定められているのでこの様なトラブルは起りえないのである。

現在船の汽笛には様々な音色や音圧（音の強さ）で使用されている。その音を聞けば目を閉じていても「あれは何丸、何号」とすぐわかり、その船の個性とも受け取られる。運転手同志のトラブルは絶えないが、海上では前述の七月に法令が改正となり昭和六十一年迄には全て新しい

なつていて。ちなみに車ではクラクションの音が、前方二田の位置で一一五dB以下、九〇dB以上で周波数の基準は無い。以上汽笛について解説を加えたのだが、最近特に港において汽笛が余り聞けないとというのはどうしたとか。

それには三つの要因が挙げられる。

一、水先案内人、タグボートの無線機使用。

二、騒音公害。

三、見送り人の減少。

一、水先案内人、タグボートの無線機使用がどうして要因なのであろうか。これは港の各施設（岸壁やブイ）に外国航路や国内航路の大型船が離着する場合には必ず

一〇〇t～一〇〇tの船が傍にぴったりと付く。この船をタグボート（TUGBOAT）と称しているが、さほど大きくない船にディーゼル機関の五四〇t～四〇〇馬力を搭載している。これが同じクラスの客船だと一〇〇t～四七〇馬力なので、ざつと五倍以上のパワーの持主ということになる。

この船の役目は、大型船に付き、押したり曳いたりして狭い港の水域での動作を助け、安全な出入港や離着岸をうながすのである。大きな重い船が相手なので自然パワーも強くなれば役に立たないし狭い場所では小回りも要求される。普通一隻がその作業にあたるが岸壁の状況やシケた時、相手が非常に大きい船だと三、四隻がスクランブルを組んで作業にあたるので文字通り「TUG」マッチとなる。

しかしその作業は独自でなく、大型船に乗り込んだ水先案内人の指示通りに動かなければならない。何故ならば水先案内人は長い船長経験に基づいて船、港域、気象、海象、タグボートを熟知して出入港に際し全権限をその船の船長から委任されているからである。

ぶつく・えんど

「著者に『読みられ権』新設」という記事をご覧になつたでしょうか。三月十日の朝日新聞です。これはイギリスの話。記事の全文を紹介します。

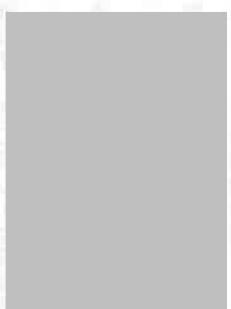
「図書館に自分の著書を備えられると、本の売れ行きが落ちて損をする」という英國の著作家の訴えを受け入れて、英國は図書館所蔵の本の著者へ補償金支払い制度を設けようとしている。チャーノン芸術担当国務相が八日（三月）、議会に提案し、四月には法案を成立させ、準備が整いしだい実施する。

売れた本から著者が収入を得るのを著作権とすれば、この制度は「読みられ権」を認めるものといえよう。公共図書館が購入した三十二ページ以上の本なら小説でも詩でも学術書でも種類をとわず、利用者の借り入れ頻度に比例して「得べかりし収入」分を政府が補償するという。

補償額は一年につき最低五ポンド（約二千二百円）

この作業には水先案内人とタグボートとの密接な連絡が必要であるが、遠く離れているため肉声では通じず汽笛の合図によつて双方連絡するのである。たとえば「短音一回」が右へ曳け、「短音二回」が左へ曳け、「長音、短音、短音」が作業停止等、他の法令に定められる信号と混同しそうであるが何の支障もなく、出入港船作業に信号として用いられた。したがつて港に出船入船が有れば当然この信号が交があるので、昼夜を問わず大きな汽笛の音が港に、六甲山に響き渡るのであるが、これは昭和三十八年迄の話で三十九年からは次第にこの音も減少してゆくのであった。

（つづく）



から最高五千ポンドまでで、著者の死亡後も家族などに支払われ、通算五十年間は有効。著作の数には関係なく、その著者の作品すべてが英國の六千の公共図書館で何回借りられたかをコンピュータで計算、その頻度に応じて支払われる。英國は当初、年間二百万ポンドの予算を見込んでいるが、いざれはもごと増えそうだという。

* * *

日本で初めての点字図書・録音図書の全国総合目録が完成した。国立国会図書館が編集し、紀伊国屋書店が発売したもので定価は二五〇〇円。今回の目録には、昭和五十六年一月から六月までの二二三八点が収録されている。いつ、どこで、どの図書が点字化され、あるいはテープに録音されているか、一目でわかる便利な目録だという。所蔵図書館名も入っているので相互貸し出しに役立つ。今後は年二回刊行の予定。身障者の「読書」についてこの目録の出現は大きな朗報だ。当店でも備える予定ですが、入手も可能です。（朝日新聞・四月五日）

「大切なことは目に見えないんだね」という、星の王子さまのつぶやきが心の底に響いてきて、ふと夜星を見あげてしまう。

目に見えないことでやつてきたこと。役に立つかどうかはわからないけど、海文堂では出版社の目録の整備に取りこんできました。目録の整備というのはいつまでやつても完全ということとは程遠いのですが、だいぶ集まつてきました。出版社の五〇音順にファイルして、読者の問い合わせへ出版社からひけるようにしています。インフォメーションでご利用ください。

郷土誌の窓

教育をめぐる出版物や雑誌が今年に入つて次々と刊行されている。前号に兵教組が母体のひょうご芸術文化センターが発刊した「発言'82」の紹介をしたので、同誌以外で目についたものを今号で紹介することにしよう。

高教組が母体の兵庫教育センターからは「季刊・兵庫の教育運動」がこの四月に創刊された。『兵庫の父母と教師がつくる教育雑誌』をめざして、創刊号の特集は、兵庫の教育はいま。深刻な教育の荒廃を、教師だけではなく、父母とともに克服していくという決意のもとに刊行された。発行は年四回で、次回七月号は「私の子育て、私の教育実践」の特集を組み、教師や父母の声を紹介する。定価五〇〇円。問い合わせは同センター（電話番号）まで。

県立幼児教育センターでは、四月七日、家庭教育の手引書『子育て』を発刊した。同センターでは昨年、県民から育児に関する質問に答える形式で『親の悩みにこた

える』を発行したところ、たちまち一万部が売れ、育児に悩む親がいかに多いかを裏づけた。この本は親に正しい子育ての知識を身につけてもらおうと一年がかりで編集したもの。希望者には四百円で頒布。問い合わせは同センター（電話番号）、または兵庫県文化協会（電話番号）まで。

〔サンケイ新聞・四月八日〕

* * * * *

県下の小・中・養護学校生の詩と絵のすぐれた作品を集録した『ひょうご'81こどもの詩と絵』が刊行された。

この本は国際児童年を契機に、兵教組・ひょうご芸術文化センターらが児童、生徒の生活と、そこから生まれる豊かな表現を記録しようと一昨年から年に一冊づつ発行しているもので、詩百二十二編、絵七十四点が集録されている。希望者には一冊八〇〇円で頒布。問い合わせは兵教組出版部（電話番号）まで。

〔サンケイ新聞・四月六日〕

* * * * *

『政治の流れの中で一尾崎光雄時評集』（定価五〇〇

円）という本をお預りして販売している。この本は、兵庫県会議員・尾崎光雄さんの時評集。時々の社会の事件や事象の中で、一人の政治家として「現実を理想に高める努力」をつづけようと決意し、その姿勢の確認として約二年前から毎月一回一千字程度の時評を発表してきたものをまとめたもの。「わが国の国際的地位」「庶民の実感」「校内暴力考」「原発リコールの教訓」「憂うべき『教科書論争』」「ポストポートピア」など、二十二の時評が集録されている。

発行所 議会ジャーナル社

（電）

庄野潤三さんが昭和五十五年六月から五十六年九月まで雑誌「海」に十六回にわたって連載されていた「早春」が一月に本になつて出た。以来入荷するとすぐに品切れになるという好調な売れ行きで、今手元の本の奥付けを見るとへ昭和五十七年三月二十日 第四版／となつていて。短期間のうちに増刷を重ねたわけだ。この『早春』

(中央公論社刊・一六〇〇円)は神戸の話である。著者が妻とともに青春の地・神戸を再訪する、という話だが

内容は神戸という町の移り変わりを、静かではあるが見

事に映しとった「神戸物語」である。著者のまわりの人

びとの交流を通して神戸と人間をやわらかく、あたたかく描いた本。陳舜臣さんの『神戸物語』とは違つたところから見た神戸の姿に神戸市民は、「神戸はいいなあ」と実感されることと思う。

＊＊＊＊＊
「季刊・河」二十一号(定価五〇〇円)が届いた。目次を紹介しておこう。

○郷土の遺跡を訪ねて—多可郡からの報告—(神崎 勝)

○播磨・西摂の計画古道と条里(吉本昌弘)

○石燈籠—石像歴遊・加古川編—(三浦孝一)

○新害虫の侵入とその対応—防虫近・現代史のひとつこまとして—(岡本大二郎)

○多可郡中町における札遣い—私礼—(脇坂俊夫)

○わが心柱なる播磨王朝(国領駿)

「季刊・河」は当店にて毎号販売していますが、定期

購読のお申し込みは左記まで。

発行所 加古川流域史学会

加古川市加古川町

電話

＊＊＊＊＊

神戸新聞出版センターから『兵庫を飛ぶ—兵庫県航空写真集—』(定価二一〇〇円)が発行される。本巻・別冊の二分冊となつていて、本巻には兵庫県下の91市町三三〇カットを収録、別巻には自然・産業・文化遺産の

クローズアップ写真が一六〇カット収録されている。郷土を空から見つめるのも悪くない。前に刊行された『航空写真集・きょううど兵庫県』(兵庫県教育図書販売発売・三三〇〇〇円)は精密な垂直写真だったがこの本はナ

ナメ写真で、また別の発見がある。目の高さが違えば知つていい町も信じられないぐらい変貌してしまうことわかる。

＊＊＊＊＊

神戸市生活局が消費生活に欠かせない知恵を盛りこんだ『くらしのハンドブック』を発行した。昭和五十年か

海文堂案内版

ら開設されている「通信制消費生活講座」のテキスト四冊分を再編集したもので、へ食べるへ装うへ住まうへくらしの約束の四章に分けてわかりやすく解説して

ある。生活のグレードアップに役立ちそうだ。新書判、百九十六ページ、定価二五〇円。当店にて販売中。

(N)

★海文堂ギャラリーでは五月十五日までへ陶芸書フェアを開催しています。期間中三〇〇〇円以上お買い上げの方に、有名陶匠による“ぐい呑み”をプレゼントしています。

★五月二十日(木)から三十一日(月)まではへ芹沢鉈介秘蔵“型染しさえ”展を開催いたします。昭和四十五年七月から一四五年にわたり、朝日新聞夕刊に連載された、武田泰淳作の小説「十三妹」の挿絵として製作された型染の原型が芹沢先生のもとに秘蔵されていたものを改めて着彩、題筆をいただいた大変貴重なものです。

★六月一日(火)から十三日(日)までは、へベルナル・ビュッフェ「カルメン」展を開催いたします。カルメンシリーズ十五点、その他六点を展示いたします。ご期待下さい。

★一階入口前のブックプラザでは五月五日から五月十五日までへ岩波ブックフェアを開きます。岩波書店の刊



行物をゆっくりとご覧ください。五月十五日からは、
絵本ブッククラブ会員募集のためのフェアを五月末
日まで予定しています。

★文庫ゾーンでは、新潮文庫へイラスト&マイルドエッセイ／フェア、角川文庫へ西村寿行フェア、早川文庫へピックアップ30／フェアをそれぞれの平台で開催中です。

海文堂ギャラリーからのお知らせ

「カタログ・レゾネ出版記念」 「アンドレ・ブラジリ工展」

フランスの香りと独特的の詩情にあふれる作風で、日本にも多くのファンを持つ現代フランス画壇の代表的作家の一人、アンドレ・ブラジリエ画伯の展覧会を、国際都市・神戸にふさわしいポート・アイランドで開催することになりました。この展覧会は、ブラジリエ画伯のリトグラフィー作品をすべて収録したカタログ

・レゾネの出版記念展でもあり、画伯自身のコレクションから初期の作品も特別出品される、回顧展とも呼べるもので。

今回もシャンタル夫人を伴い、四度目の来日ですが、神戸を訪れるのは初めてということです。ブラジリエ画伯は、日本画壇の巨匠・東山魁夷画伯とも親交があり、この展覧会によせて、日本に送られて来た自筆のメッセージの文面からも、日本びいきである様子がうかがわれます。

この機会にぜひ御高覧賜りますよう、御案内申し上げます。

記

一、会場・会期

ポートビア国際会議場

昭和五十七年五月二十三日(日)・二十四日(月)

十時～二十時

二、主 催

兵庫ほるぶ 共 催

海文堂書店

三、出品内容

リトグラフィー コレクション 約一三〇種類

水 彩 画 新 作 約七種類

タピストリー 二点

四、会場ではブラジリエ画伯のサイン会を行ないます。
入場は無料です。

* アンドレ・ブラジリエ 主な受賞と展覧会

一九五三年 ローマ大賞

一九六〇年 ヴィルヌーヴ・シユール・ロー美術賞

一九六一年 シャルル・モレ賞

青年画家展
サロン・ド・チュイルリー

各地ピエンナーレ
パリ、ニューヨーク、東京(一九六九、一九七四、一九七七年)、ヘルシンキ、ジュネーヴ、カラカスなど世界各地で個展
国際形象展
フランス・ロワール地方シュノンソー城にて回顧展(一九八〇年)
略歴
一九二九年 フランス・アンジュー地方生まれ。
一九四九年 ニコール・デ・ボーザール(芸術大学)両親とともに画家。
一九五四年 入学。ブリアンションに師事。
一九五四年 ローマ大賞受賞後、ローマ・メディチ家別荘に滞在。
一九五八年 シャンタル・ドートリーヴと結婚。
一九五九年 ムルローの工房にて、リトグラフィーの処女作を作成。
一九七四年 初来日。
一九七七年 二度目の来日。東山魁夷画伯とともに日本各地を旅行。
一九八一年 三度目の来日。

★一階西奥の法律書コーナーでは、日経文庫・日経新書・春のブックフェアを開催中。
(一一〇〇円)が好評です。前に出た『巡洋艦』(一〇〇〇円)『戦艦・巡洋戦艦』(一〇〇〇円)も一緒に並べて展示しています。